



思い出はキレイなままに……。

登場人物

田所 和正 主人公。鬼瓦第二校の学生。水泳部。勉強は苦手。喧嘩っ早い。幼馴染の市川優奈を心配させないために我慢するようになった。

市川 優奈 ヒロイン。幼馴染。クラス委員。子供の頃はいつも和正の後ろに居た。勉強で和正の力になろうと頑張っている。スタイルが良いが、性的な知識が乏しい。クラスメートが自分に対してどのような視線を向けているかについて疎い。

大崎 浩司 バスケ部。優奈に目を付けている。クラスメート。

笹井 大吾 バスケ部。浩司の取り巻きの不良。クラスメート。

筒井 文雄 優等生。クラス委員。

相沢 千絵 和正のクラスメート。

石井 奈津子 和正のクラスメート。チアリーディング部。

植田 和美 和正のクラスメート。チアリーディング部。

渡辺 芳雄 和正のクラスメート。野球部。

北村 春子 和正のクラスメート。

時田 信彦 野球部。先輩。

小松 俊夫 野球部。先輩。

稲葉 純一 野球部。先輩。

浜崎 法子 和正の担任。

杉田 聡 教員。妻子持ち。理科の教員

今井 松子 保健室の養護教諭。

プロローグ セピアも褪せて……。

——まってよ……——

色とりどりの遊具を前にきやつきやと甲高い声ではしゃぐ子達。
大きなボールはソフトな造りでぶつけあっても痛くない。それでも突然のことに驚いて泣いてしまう子もいる。
バケツで水を汲み、砂場へ運んで泥団子を作る子。誰が一番丸く作れるか競い合い、握り過ぎて碎いては頬に泥を付けていた。

——まってってば……——

青い割烹着のような制服を着た女の子が男の子の後をついてまわる。

おにごっこをしているわけでもないのについてくるのはどうしてだろう。

最近入園したばかりの女の子にとって知っているのは、その男の子だけ。

家が近くで今日も一緒に登園してきた。

たまにお家に泊まりに行ったりもする。

一緒に風呂呂に入ってご飯を食べて歯磨きをしていた。

トイレが一人で出来るようになったのは男の子が先だった。

でも髪を一人で洗えるようになったのは女の子が先。

タオルケットの柄が流行りのキャラクターで取り合いもした。

その後は母に怒られて、二人で一緒にタオルケットを掛けてもらって夢の中。

——くんなよ。おんなはだめ。あっちでおままごとしてろよ——

——どうしてそんなにじわるゆうの？——

ぐずつき泣いてしまう女の子。

他の子が心配そうによって来る。

——だいじようぶ？ こっちでいっしょにあそぼうか。いいの？ そう——

でも女の子は男の子が大好き。

——わかったよ。こっちにきて。すぐなくやつとはあそばないんだからな——

いつもこうして、最期は来てくれるから……。

——ありがとう、まさかずくん——

すぐに泣き止むから嘘泣きかもしれない。

でも、男の子だから許してあげる。

女の子を助けるのが男の役目だから……。

——こっちだよ。しゃべるもった？ おやまをつくるぞ。トンネルほるから……——
——うん、あたしががんばる！ ——

十十

校庭で走り回る子達。

はだしでトラックを周り、バトンを次の走者に渡す。

少年はぐいぐい抜いていく。

一人、二人、三人目の背中を追う……。

ビリから一生懸命追い上げた。

！

次の走者にバトンを渡す。

けれど、急いだあまりに足をもつれさせて戸惑ってしまう。

その隙に後ろから追い上げられて抜かれてしまう。

——どうしよう……。――

少女は突然のことに涙目になる。

——走れ！ とにかく走れ！ 大丈夫だって！

後から少年の声が聞こえる。

聞きなれた声。今でもたまに夕飯を一緒にすることがある。

——うん！

後を向いて頷くと、少年は少し渋い顔になる。

そんなことより走れ。

そう言いたそうだった。

一生懸命走ったけれど抜かれてしまった。

追い上げをするにはちよっと手間取り過ぎた。

もともと運動は得意ではない。

クラス対抗全員リレ！。

結果は三位。

バトン渡しに手間取った少女に批難が集まるのも自然なこと……。

——すまん、俺、バトン渡す時にてまどったわ。その後もこけそうになったし、俺のせいでみんな、ごめん。

ホームルームで前に出てきてごめんと謝る少年。

みんなでぶーぶー文句を言う。

次の日は頭を丸めて反省してまーす……。

みんなに笑われていた。

半被姿で神輿を担ぐ。

町内を練り歩いておひねりもらう。

肩が痛いけど、大騒ぎしながら歩くのが楽しかった。

この後は出店でクジ買ったたり射的したりヨーヨーつりしたりするんだ。

おつかいしておつりくすねて貯めたし、絶対に大当たり引く。引くまでやるんだ。

そう決めてたんだ……。

けど、ダメだった。

隣で焼きそば食べてる奴の食券代になっちゃった。

アイツさ、落したんだって。

肩から掛けてたじゃん。ポーチ。神輿担いで、いつの間にかほつれて、落しちゃったんだよ。

それでお小遣いから食券まで全部なくしちゃった。

お腹空いた、家に帰りたいけど鍵かかってる。

お母さんもお父さんもどこにいるのかわからない、どうしよう。

そんなの俺だってどうしようだよ……。

結局、俺の欲しかった物は他の奴が当ててた。

悔しかったなあ。しかも、その水鉄砲で俺とアイツではんぶんこのわたあめ撃たれてしぼんだんだもん。

掴みかかろうとしたけど、今度は焼きそばまで落しそうでやめた。

だから女ってとろくて嫌なんだ。

いつもいつも……さ。

でもさ、水鉄砲、壊れてやんの。

そりゃそうだよな。

焼きそばのホットプレートに泥水ぶっつけたんだもん。

ぶん殴られてた。

ざまーねーな。

それと、アイツのポーチが見つかったんだ。

名前書いてたおかげだって。

その前に落とすなよ。
で、お金、返してくれた。

おかげで欲しかったゲームがぎりぎり買えた。
クジ、引かなくて良かったって思う。
でも、アイツが横から見えてくるからやりづらい。
おかげで夏休み終わってもクリアできなかった。

＊＊

ボールを投げられる。

足元を狙われてギリギリでバウンドしていた。
けれどアウトを言い渡される。

少年はバウンドしたといい、審判の子は当たったんだからアウトと言う。
バウンドしたらセーフなのがルールだと言い張る少年。
バウンドなんてしてないという審判の子。

少年は審判の子に掴みかかる。

先生が慌てて止めに入る。

審判の子は唇を震わせている。

少年は真っ赤になって睨んでいる。

——審判の言うことは絶対です。言い渡されたら、不服であっても従いましょう。それがルールです。

理不尽な気がしたけれど、外野に回る少年。

女の子がさっき、バウンドしたの見た。音も聞いたよと言ってくれた。

女の子だけでもわかっていてくれるなら、それでもいいと思った。

眼鏡のあいっはムカつくけれど……。

＊＊

寒くて寒くて大変だった。

通りを雪かきしないと車が出られないし、学校行くの大変だから、俺は昼から夕方までがんばって雪かきしてた。
油断するとすぐ凍るし、こういうのは始めが肝心だ。

いつもならアイツもすぐに雪かきするのにな。

どうしたんだろう。

風邪引いたんだってさ。

仕方ないな。

アイツは俺と違って馬鹿じゃないもんな。

夜まで頑張ったよ。

褒めてくれていいと思うぜ。

そしたら母さんに遅くまで何してるのって怒られた。

余所のところまで雪かきしなくていいのにつて父さんはたしなめられたけど、悪いことじゃないからつて母さんを宥めてくれた。

夜に電話きたよ。

ありがとうだった。

そんなことよりさつさと風邪治せよ。

だんだん遊びに行けるところが広がってきた気がする。

昔はあっちにいっちゃいけない、こっちであそびなさいだった。

でも、どんどん、だんだん広がっていつていく。

すこしぐらいいても……。

こういうの繰り返していつの間にか広がってた。

俺の世界が。

俺だけが知ってる場所。地図を見れば、なんだ、こんなに近いのかつて場所だけどさ。

誰かと喧嘩したり、怒られた時にこっそり行く。

あんまり人が来ない場所だから好きだった。

春休みはいつも行ってた。

でもさ、そしたらなんかアイツが来るんだよ。

いつもどこ行ってるの？ 三倍で返してもらってないよ？ つてさ。

なんの話つて聞いたら、二月にチョコレートケーキ食べたでしょつて。

頑張つて作ったからつて言つてたけど、あれつて雪かきのお礼じゃないの？ それに一緒に食べたじゃん。

なのになつて急に言われたつてそんなの知らないよ。

でもアイツ、我儘言い出して迷惑だ。

代わりにいつもどこ行ってるのか教えてつてさ。

やだよ。

あそこは俺の秘密の場所なんだ。

俺しか知らない場所なんだ。

だから教えてやらないんだ。

絶対教えないんだ。

水泳は楽しい。

身体が軽く感じる。浮かんでいると勝手に流れていく。

仰向けになつてたゆたうのが楽しい。

潜水すると光の乱反射で隠れられる。

アイツにちよっかいだそう。

するつてもぐつて腕を掴みに行こう。

息を止めるのは自信がある。

スイミングスクールでは上級生と同じぐらいできる。
誰も気づいていない。

こっそり近づいて、アイツの足をちょっと掴む……つもりだったのに急に潜るから……。

——……!!

ぐにやって感じ。

水の中だから。

——ごめん。

——こっちこそ急に潜って……。大丈夫？ 頭ぶつけなかった？

——ああ、平気……。

慌てて謝った。

向こうも。

でも、その後、目を洗う時に言われたんだ。

——エッチ……。

気付いてたんだ。

俺があいつのおっぱいに触っちゃったこと……。

言う程大くないのにさ。

夏祭りの日は特別だった。

浴衣と下駄でなんかいつもと違う雰囲気なんだ。

ちよっとドキドキした。

昼間は半被姿で一緒に神輿かっいでわいわいしてたのに澄ましてやんの。

普通に歩いているのに待ってよ待ってよってうっとおしい。

仕方ないからゆっくり歩いてやったんだ。

なんかクラスの奴らがうるさくってさ、俺、あいつの手を引っ張って神社出ちやった。

怒るかなって思って謝ったんだけど、許してくれた。

いつもならもっと目釣り上げて怒るくせにな。

花火も始まるし、戻ろうかって言ったけど、人込みは落ち着かないんだって。

だから高台に行くことにした。

俺達だけの場所だからってさ。

下駄で登るの大変だからって、おぶらされた。

重くなったって言ったら耳引っ張られた……。

でも、それよりも、なんか変わってた。

背負って登るから疲れた。

だから少しばててたんだよ。

そうじゃなかったら、そんなふうにならない。

花火を見てた。

アイツの顔が赤とか青とか緑とか変な色に変わるのが楽しかった。

だから見てたんだ。

終わるまで。

おりの時もおぶるんだけど、疲れたでしよって少しそこで休んだ。

祭りの日だから少しぐらい遅れても平気だって。

だから俺も話してた。

最近あんまり話して無かったってさ。

そんなつもり無いんだけど、そうだったかもしれない。

その後、父さんと母さんに怒られたんだ。

当然だけど。

掃除はサボるし、卒業制作も進まない。

アイツのクラスは大変だな。

アイツとメガネがいつも残ってるのを知ってた。

クラス委員だから責任があるんだってさ。

手伝ってやりたいけど、クラスが違う。

先生はアイツとメガネだけ叱る。

先生がちゃんと指導できてないのがいけないのにな。

このままじゃ間に合いそうにないし、出来上がればそれでいいじゃないか。

だから学校に隠れてこっそり手伝った。

先生はすごく怒った。

メガネがなんでか怒られてた。

俺、悪い事したかな。

こういう時ってどうすればいいんだろう。

わかんない。

……。

俺のせいで怒られてるんだもんな……。

——先生、俺がやったんです。

——君は別のクラスじゃないか。どうして他のクラスの制作を手伝うんだ？　こういうのはクラスのみんなで協力して一緒にやるから意味があるんだ。それをどうして他のクラスの子が……。君はただやれば良いって思ってるんだろう。卒業制作の意味が分かってないよ。そういう自分勝手な考え方を持つていたら進学しても苦労するよ。君みたいな良い恰好したい子っていうのはたいてい失敗する。恩着せがましくして嫌がられるんだよ。今だってそ

うさ。そうだろ？ 制作委員もそう思うよな？ 君達でやれるのに、違うかい？ そうだろうそうだろう。ほら、君は余計なことをしたんだよ。君がした場所は全部元に戻すんだ。さあ、今からやりなさい。

そんで言われた通りに俺がやったところ剥してたら、アイツのクラスの奴らと喧嘩になった。なんで俺達の卒業制作壊すんだ。ふざけるな。別のクラスの奴が邪魔してんじゃねーよ！ 喧嘩になった。

しかも、俺のクラスの卒業制作が壊された。

俺は怒って殴ったんだ。

お前ら卒業制作なんてしてないだろうって。

先生たちが来た。

めちゃくちゃになった卒業制作を見てみんな驚いてた。

俺達は指導室に連れていかれてわけを聞かれた。

そのクラスの奴らは当然言うんだ。

俺が卒業制作を壊したからだって。

でも俺だって言う。

俺が手伝った場所を先生に元に戻せて言われたから剥したんだって。

そしたらあの先生は嘘をついた。

自分はそんなことを言っていない。彼は自分のやった悪戯を人に擦り付ける卑怯な奴だ。

頭の中が真っ白になった。

先生が言いつけたのに、今になって何を言ってるんだって……。

眼鏡にさ、詰め寄ったんだ。

先生は確かに言ったよな。元に戻せて。お前も一緒に居たよなって。

先生がさ、眼鏡の肩を掴んで言うんだよ。

——正直に答えなさい。

正直に答えてもらいたかったけど、俺はその日、母ちゃんに叩かれた。父さんにも怒られた。先生が嘘をついてるんだって言ったのにさ……。信じられないよ。

——聞いたよ。酷いよね。私、明日先生に話してくる。

アイツがくれた電話が嬉しかった。

——それより、卒業制作、皆手伝ってくれてる？

——うん。みんな急に……。先生に言われたからだけだね。

——そっか。じゃあ、良かったじゃん。

——よくないよ。

——だって、二人だけで居残りしなくてよくなったんだろ？ よかったじゃん。

——よくないよ。ちっとも……。

——いいんだよ。じゃあな。

なんでアイツが泣いちゃうんだよ。
やっぱり俺、悪い事したんだな……。

もともと勉強ができる方じゃない。

運動は水泳が自信あるけど、シーズンは夏の間だけ。

おまけに部員減少、顧問も転任。大会ほとんど申請できない。やる気が起きない。
今年からは違うクラスの奴とも一緒になったけれど、ちよつと馴染めない。

俺もあいづりもなぐり合ったはずなのにな。

知らないくせにからかう奴が居たから襟首掴んでやった。

ちよつと喧嘩になって、俺だけ生徒指導室。

停学にはならなかったけど、みんなの前で謝らされた。

——喧嘩は駄目だよ。

その通りだと思うよ。

悔しいし、情けないもん。

でも、そんな顔されたことがなんだか嫌だ。

——わかったよ。我慢する。

——ほんと？ 約束だよ。

——ああ。学校では我慢する。

——もう、学校以外でも我慢してください。

——わかった、わかった。で、何？

——そろそろテストだよ。ほら、一緒に勉強。ほつくと赤点になっちゃうもん。

——しかたねーじゃん、俺馬鹿なんだから。

——ダメだよ。だって、夏祭りの準備、手伝ってもらわないと……。

——……わーったよ。

冬も冬であれがあるからこれがあるから……。

おかげで補習は免れましたよ……。

三月にさ、十四日。ホワイトデーなんだけど、その日に義理チョコのお返し持って行ったんだ。
でも、お婆さんしかいなかった。
ゼミの春期講習行ってたんだ。

そりゃそうだよな。

アイツは勉強できるし、進学に強い私立狙うんだよな。

クラス委員を務めて手芸部副部長に合唱部……。

学業優秀、運動はいいというて、内申書は完璧。非の打ちどころがないといえはその通り。
ある一点を置いては……。

——正和君、優奈はゼミに行ってるから……。それにもうそろそろね？ 男の子と女の子だし、お付き合いの仕方考えたほうがいいと思うの。正和君は水泳が得意だし、そっちの方で集中したほうがいいんじゃないかしら。優奈も勉強が忙しくなるし……。

——はい。そうですね。お邪魔しました。

おばさんは俺が頭を下げると同時にドアを閉めてた。

そうだよな。

俺みたいな中途半端な奴、優奈とはレベルっていうの？ とにかく違うんだ。

あいつは頭良いし、みんなからも信頼がある。だからクラス委員になってる。

そろそろ俺も幼馴染ってだけで優奈に付きまとうの止めないといけない。

じゃないと、また困らせてしまう。

俺は喧嘩っ早いし、馬鹿だから……。アイツのこと、困らせてしまうから……。さ。

一章 雑巾

鬼瓦第二校の校庭には桜の花が咲いていた。

まだ肌寒い風が吹く中、グラウンドを走る体操着の集団が見える。

春先は半袖短パンが決まり。寒さに震えているのを咎められて、全員でマラソン。

その隅で女子は長袖長ズボンのジャージでバレーボールをしている。

授業終了のチャイムが鳴る頃には男子は汗まみれ。

着替えるのを面倒がる子はそのままジャージ姿でトイレに行く。

最近知らない顔も無く新鮮味も薄れ、皆それぞれの友人と部活や勉強、休日の予定を話していた。

田所和正も汗まみれになっていた。

水泳部所属の彼は、他の運動部の子に比べてやや丸みをおびた身体付き。背もそれほど大きくなく、髪が変に長いせいで文化部や帰宅部のイメージがついていた。

口数も少なく、友達も少ないせいか、クラスでの立場は湿った空気と呼ばれている。

湿った空気と言われるのは心外だが、水泳部のせいもあって変に納得していた。

次の授業は英語。宿題は昨日の夕方にアイツが無理やり手伝ってくれた。

どうせ忘れるからと放課後に残され、終わるまで帰れない。そのくせ質問をすると少しは自分で考えなさいと返される。

五時までかけてようやく帰宅が許されたけれど、おかげで宿題は間に合った。

他にも今日までに提出するプリントの確認をいくつか指示されたり……。

昔はアイツの方が落し物とかして一緒に探したりしていたのに、変われば変わるものだと思ってしまう。

それとも自分が変わっていないのかもしれない。

自分はまだまだ詰めが甘い気がする。

いくら襟の無いトレーナーからワイシャツ、ブレザーに変わっても、気構えが変化していなければ成長していないのと一緒だ。

他のみんなはだんだんと成長していくのに、どこかおいてきぼりを受けているような気がする。

それがどうしてかを深く悩む程深刻な気がせず、今に至る。

「おーい、和正、ノート見せてくれよ」

クラスメートの渡辺芳雄がやってきて英語のノートを引っ張り出す。

「おまえなあ、俺の英語の点数知ってるんだろ？ もっと頭の良い奴に聞けよ」

和正は去年の期末テストでもギリギリ赤点を取り、春休みに追加プリントを課せられた。それは芳雄も同じだった。

「知ってるよ。でも、お前の場合、家庭教師ならぬクラス教師が居るだろ？」

にやにやしながらノートを開いて写しはじめる。

「うっせーな」

アイツの事を言われるとむっとしてしまう。自分はそんなつもりがないのに、アイツのほうがおせっかいを焼いてくれるから。

そのことをからかわれるたび、自分がどうして成長していないのかわかる気がした。

「ええと、これがこうでこう……。いやあ、助かりますわ」

「お前が直接聞きに行けばいいじゃん」

「そういうなよ、旦那……。俺はほら、別に仲良いわけじゃないし、女の子に聞きに行くと変な感じじゃん？」

それに旦那の女に手を出すなんて恐れ多いっすよ」

へらへら笑いながら下手に出る芳雄は、最近になってすり寄ってきた押しかけ友人。ノートを利用されているだけと思うと、アイツへの中継地点なされた気分だ

それでも体育の時間や英語の時間、他の課外授業の時も声を掛けてくれるから、こいつなりに気を遣ってくれているのだろうとわかる。

いわゆる要領の良い奴だ。

自分に無い特技があって羨ましい。

「ったく、うぜーな。英語なんて、ここ日本だろ？ 英語わっかりませーんっての」

教室の後ろでだらしなく椅子に腰かけて大声で話す奴が居る。

どのクラスにも一人居るというか、振り分けられる問題系男子、大崎浩司。背が高くて声が大きくて、言葉が悪くていきがっている。

髪こそ染めていないけれど眉毛を添っている。シャツは半開き、ベルトはゆるゆるでズボンも変に下げている。それがかっこいいのかわからないけれど、規則違反をすることに意味があるらしい。

言われたことに反抗することで注目を集めたいのかもしれない。

ああいうのも幼いと思う。自分とは違う選択しているだけ。

チャイムが鳴り、英語の白沢がやってくる。

クラス委員の筒井文雄が号令をかけ、英語であいさつをする。

「へろー、みすたーしらすーわ、ないすとうみーとうー」

同じことを繰り返しているだけだと、それが英語なのかよくわからなくなる。

だんだんそういう方言なのかなと思いついたところで口パクになっていた。

黒板を写して適当に読んで、対話形式で芳雄に相手をしてもらう。その繰り返して身に着くほど語学は甘くないと思いつつ、ぼんやりと終わるのを待っていた……。

五月を過ぎたところで運動部が活発になる。

先輩達は最期の大会に向けて張り切り、自分達も新人戦を控えて練習に専念する。そのために授業時間が切り上がり、練習時間に回される。

最近力がいっているのが野球部。毎年振るわなかったのだが、今年の三月の地区の試合で優勝した。

何が変わったのだろうかと噂されていたが、編入してきた学生が変化の原因らしい。

芳雄も野球部で、練習が忙しくなったとひひい言っていた。

「すまん！ 掃除代わってくれ」

少し走ってから帰ろうとしていると、芳雄が手を合わせて頼み込んできた。

昨日は宿題写させて、今日は掃除を代わって……。

「俺はお前のお手伝いじゃないっての」

「すまん。埋め合わせはするから、今日だけでも頼む」

なんでも昨日、練習中に気の抜けたプレーをしてしまい、そのせいで草むしりと石拾いを言い渡されているそう。昨日も夜までかかって終わっていないのに、今日もとなると練習どころではない。

彼が最近になって七月の新人戦でライトの八番で出られると喜んでいたのを思い出すと、少し気の毒になる。

「わかったよ。しょうがない奴だな」

数少ない友人の頼みとあって無下に断ることもできない。和正は荷物を置くと、掃除に取り掛かった。

「ありがと！ もつべきものは話の分かる友達だ。じゃあな！」

調子よく言い、教室を出る。それを班長の相沢千絵が咎める。

「ちょっと、渡辺君も掃除当番でしょ？ さぼらないでよ」

「悪い、代わりに和正おいてくからこきつかって」

「全く……、田所、さぼらないでしっかりやりなさいよ」

千絵はむっとしながら和正を睨み、机を運んでいた。

千絵は今年になって同じクラスになった子で、よくアイツと一緒に居るせいか、和正も名前も覚えていた。きつめな感じでアイツと対照的。女子にしては背が大きいこともあってか高圧的に接してくる。

やたらと男女差を意識しているところがあり、特に話すこともないのに見ていると、すぐ睨み返してきて、むっつりスケベと言ってくる。

誰がお前なんかにと言いたいけれど、言い返せば倍になって返ってくるだろうし、彼女もそこそこ身体が育っているから、それは自意識過剰とも言い難い。

胸もそれなりに大きいし、おしりも丸い。腰周りはいくびれていて、たまにモデルごっここと称してポーズを決めるが様になっている。

それなのに男子にそれほど人気が無いのは、その性格が故だろう。

あれで性格が良ければ好きになっていたと芳雄が言っていた。

和正からすると話したくない相手なのだが……。

「あれ？ なんで和正君が掃除してるの？ 違う班じゃなかったっけ？」

誰かと違って優しい声。聞きなれているせいか、人込みの中でも聞き分けられる自信がある。それぐらい付き合いが長いと自負している声。

笑顔でやってきて、不思議そうに首を傾げるアイツ。

いつの間にか同じ視線で話すようになっていた気がする。

丸い瞳が優しく垂れ気味で大きい。

鼻は少し低いけれど形が良い。

色白な肌が特徴的。手芸部だから日焼と縁遠いけれど、昔はプールサイドで健康的に焼いていた。

日焼けすると痕ができて、ノースリーブのワンピースを着て勝手に恥じらっていたのを覚えている。

柔らかそうな頬はいじわるすると膨れたりして、つつくと「もー」と眉をハの字にしていた。

最近是小言が増えた気がするから、こうやって笑顔を向けてくれるのは久しぶり。

「さっき渡辺に頼まれたんだよ。あいつ、グラウンドの草むしりと石拾い頼まれてるんだってさ。練習できなくなると新人戦で困るからって代わってやったんだ」

「そうなんだ。和正君は優しいからね」

「断れないだけでしょ」

嫌味だけは飛ばしてくる千絵に、アイツは「ちえー」と口をへ字にした。

「優奈も掃除しろよ」

「あ、うん。ごめん」

とりあえず掃除を終わらせよう。ただ、よく考えたら英語の宿題があったはず。となると、今日の放課後もアイツが居残り勉強しようって言いだすはず。

——ゲーム、やりたかったのにな。

ふうとため息をつき、掃除の手を早めた。

＊＊

「いやー、悪い悪い。先週は助かったよ。なんとか雑用終わった。ほんと助かったわ」
次の週、芳雄が笑顔でやって来た。

同級生の野球部総出でグラウンド整備をした結果、雑草は綺麗になくなって、石ころ一つ落ちてない。野球部先輩達もこれで心置きなく最期の試合に向けて練習できるし、自分達もきたる新人戦に挑めると気合十分だった。

「そうか。良かったな」

「じゃあ、今週代わるよ」

「いや、いいよ。お前の練習もあるだろ。まさか草むしりの為に入部したんじゃないんだからさ」

「でも悪いじゃん。それに借り作るみたいでやだよ」

「俺は水泳部の練習まだ無いし」

「そうか？　じゃあ、お前が忙しくなったら代わってやるよ。感謝しろよな」

「なんだよそれ」

調子の良い芳雄は恩着せがましく言うと、グラウンドへ向かって行った。

和正も活動外で自主トレするために掃除の手を早めた……。

＊＊

「なあ、なんでお前掃除やってんの？　先週もしてたじゃん」

その日の午後は雨が酷かった。

体育館の使用はバスケットボール部やバレーボール部が基本だが、実績がないこともあって野球部の練習に体育館が取られる。

背の高さをかわれてバスケット部に入った浩司は暇そうに教室をうろちよろしいて、掃除に勤しむ和正をして話しかけてきた。

「先週は芳雄の代わりしてただけ」

簡潔に答えて掃除に戻る。こんな日はランニングもできないし、さっさと帰るに限る。

「ふーん」

浩司は自分で聞いておきながら、バスケットボールをくるくる回しながら興味無さそうに言う。

掃除の邪魔だから帰ってもらいたいのだが、それを言えばいちゃもんを付けて逆に長引くのがわかってる。それでも後ろの席で遊ばれているといらいらしてしまう。

もやもやした気持ちを抱えていると、後ろでがしゃんと音がした。

同じくバスケット部の笹井大吾が浩司のボールを受け損なってバケツを倒してしまった。

「やっべ」

せっかく掃除したところにまた水がまかれてしまい、やり直しを余儀なくされる。

「おい、行くぞ」

浩司はあーあと言ってすぐに荷物を手にして教室を出ようとする。

「でも」

大吾はガタイのわりに気が小さいところがあり、バケツをひっくり返した本人ということもあって多少気がひけ

るらしい。

「いいよ。どうせ掃除の途中なんだし、あと任せておけよ。掃除好きな奴がいるしよ」

「そうか？ わりいな」

誰も文句を言わないのをみて大吾はにやけながら教室を出て行った。

「……………」

北村春子はまたやり直しになった状況をみてため息をつく。

「私、今日用事あるのに……」

「俺だってそうだよ」

浩司達が居なくなつてようやく文句を言いだす男子。本人を前に言えよと言いたくなるが、仮に口に出せばごちやごちやしてさらに遅くなるから言わないのが正解だ。

和正としても面倒臭いと思いつつも、大吾が手伝うほうがむしろ遅くなるとすら思っていた。むしろ二人が帰ってくれることが一番の手伝いであり、バケツをひっくり返したぐらい可愛いものだと思っていた。

「まだ掃除終わってないの！？」

するとそこへ担任の浜崎法子がやってきた。

大学卒業後、一年の教職浪人を経てこの学校にやって来た新米教師。他の教員と比べてずっと若い。

綺麗でスタイルが良く、同年代の化粧の仕方もわからない女子と比べてずっと女性として洗練されている。

スーツでぴちっと決めていて、時折メガネをかけて厳しい態度で接してくる法子を慕う生徒も多い。ただし、それらは彼女から教授されたことの無い生徒だけだ。

完璧主義なのか少しのミスを赦さず叱咤し、提出物の催促、部活の出席率と事細かに指摘してくる。

遠目に見る分には女王様風でかっこいいのかもしれないが、身近にいてはたまらない。そんな人だった。

「三十分も経っているのにどうして……、ああもう、なんで水浸しにして……。君達、先生の目が無いからってふざけ過ぎてないかしら？ 言っておきますけど、普段の態度も試験では重要なファクターなんです。内申書を甘く見ているとゆくゆく首を絞められることになるの。君たちはまだ知らないでしょうけどね」

一言多く、そのせいで気持ちちが萎えてしまう。

「また見回りに来た時に終わってなかったら、罰として反省文の提出を求めます」

若い先生ということもあって色々他の教員から指摘されることも多いのだろう。それに負けないようにと踏ん張る反動が、こうしてヒステリーとして生徒に還元されていた。

「……最悪。何が反省文だよ。俺らが悪いんじゃないっての……」

ばかばかしくなったのか、一人が箒を捨てる。

「ちよつと宮崎君」

春子が一人を止めようとしたけれど、他の子もそれに続いて手を止める。

「皆……」

真面目な春子はサボって帰るという選択肢は無い。けれど、彼女にも早く帰りたい理由がある。落ち込む彼女は箒を掴んで立ち尽くす。

「……邪魔だよ」

和正はそんな春子につっけんどんに言う。

「ちよつと田所君、そんな言い方無いでしょ！」

女子の一人が文句を言う。他の男子への不満ごと、和正に批難が向かって行った。

「つつ立ってられたら邪魔なんだよ。やる気ないならお前も帰れよ」

和正は捨てられた箒をロッカーにしまい、モップを取り出して床を拭く。

「なにその言い方。サイテー。行こう、春子」

「でも……」

「いいじゃん。やる気なくしたし、アイツの言うとおり、帰らせてもらおうよ」

「だって……」

「いいいいいよ。ほら、春子も用事あるんでしょ。ね？」

そう促されて春子も頷く。彼女は去り際に「ごめんね」と言ったが、和正は見向きもせずに掃除をしていた。

大吾や浩司が居るのは迷惑だが、かといって他の子までいないと大変なものだと感じた。

今更ながらに用事のある奴だけ帰れと言えば良かったかもしれないと反省してしまう。

それでも法子が来る前にはなんとか終わらせようと急ぎ足になる。多少のごまかしは仕方ないとして……。

「あれ？　なんで和正君、一人で掃除してるの？」

体操着姿の優奈がやってきて、目を丸くしていた。今日はチアリーディング部に参加していたようで、タオルで軽く汗を拭いていた。

それが教室に戻ると、未だに掃除が終わっていないのもそうだが、一人ということに驚いた。特別いいわるな子が居たわけでもなく、真面目な子が何人かいたはずなのに……。

「ああ、いろいろあってこうなった。それよか机運ぶの手伝ってくれよ。早くしないと先生来るんだ。そうすると、反省文書かされるんだよ」

「なにそれ？　どういうこと？」

困惑気味に机と椅子を戻す優奈。運動は苦手だけれど頭の回転は良いから、説明より先に身体を動かしてくれる。

何度も往復をしてようやく終わり、どうやら間に合ったようだった。

「で、どういうことなの？　手伝ったんだし、ちゃんと説明してくれるよね？」

「ああ、わかったよ」

手伝ってもらって無下にもできず、事のあらましを教えてあげた。

「そうなんだ。もう……」

浩司と大吾、担任のヒステリーと腹立ててさばった男子達。用事があって泣きそうだった春子。それを追い出してしよい込む和正に、優奈は呆れたように口を開けていた。

「なら言ってよ」

「ああ、ありがと」

「そうじゃなくて」

「いいじゃん。ちゃんと終わったし。俺も部活無かったし」

「もう……」

不満そうだったけれど、優奈はすぐににこりと微笑んだ。

「どうかしたか？」

「んーん、なんか前にもこういうことあったかなって思ってた」

「ねーよ。こんなこと」

「あったよ」

「俺はそんな暇人じゃないし」

「あったってば」

「しらね」

「あ、もしかして照れてる？」

「照れてねーよ。ほら、さっさと手芸部でも何でも行けよ」

「そうやってすぐ誤魔化す」

「してねーよ、そっちこそ部活の途中だろ」

「うん。それじゃね」

「ったく……」

教室を出る優奈だけれど、思い出したように振り返り付け加える。

「卒業制作……だったよね？」

「知らないって」

手伝ったといえるのかわからないけれど、そのおかげで優奈とメガネの仕事は減ったはずだった。

邪険に扱ったものの優奈のおかげで早めに終わったことも事実。

ひとまず去って行った方へ向かって手を合わせて拝む仕草をしばし。

和正もそろそろ帰ろうと思ったところで、まだバケツが残っていたのを見つける。

片づけ忘れていたと、水を捨てに行こうと教室を出る。すると、運悪く見回っていた法子に見つかる。

「まだ終わっていないかったの！？ はあ……。掃除もまともにできないなんて……。明日、反省文を提出しなさい」

言いたいことを言う法子はすぐに廊下の向こうへ行ってしまう。

こういうところが苦手だった。

次の日、朝のホームルームはピリピリしたものだった。

法子は開口一番、反省文の提出を要求する。さぼって帰った子達は当然知らず、面食らう。

「貴方達、昨日先生言いましたよね？ もし掃除が終わらなかったら反省文を提出させるって。だいたいにしないで掃除に一時間も二時間もかける必要があるんですか？ いつもみんな三十分で終わらせてるよね？ 君たちが真面目にやらないからじゃないの？ そうやっていい加減な態度を取ると、困るのは君達なんだから。自分で自立しようと思わないと、大きくなった子供と一緒になの」

早口で捲し立てる法子に言い訳を挟む隙が無い。仮に口を挟んだところで倍にして返されるだけ。それにそろそろ一時限目の授業が始まる頃。

ひとしきり大騒ぎしてうやむやにして終わることが多い。まるで台風のような感じだと思いつつ、和正は時間が過ぎるのを待った。

「最悪。誰かさんが恰好付けるからだよ」

昨日先に帰った女子が文句を言う。

休み時間、四百時詰め原稿用紙に向かって鉛筆を走らせながら、女子は聞こえるように言う。

「ったくよお、終わらせられないならいいじゃん。あいつのせいで反省文かよ……」

先に帰った男子もそれに合わせて文句を言う。

「そういう言い方は……」

申し訳なさそうに春子が口を挟むも、女子に遮られる。

「あいつさ、春子が用事あるからって言うから、恰好つける為に一人でやったんじゃない？ 春子が好きとか？ あー、露骨」

「なんだよ。そんなことのだしに使われたのかよ……。和正ふざけんなよ」

「ちよつと……そういうの……」

突然のことに真っ赤になる春子は、擁護の言葉をかけづらくなり、俯いてしまう。

「……………」

和正が立ち上がろうとすると、机がキツッと高い音を立てた。

「……………」

男子の一人が身構えて和正を見る。けれど、和正は構わず教室を出る。昨日、既に反省文を書いていたこともあり、このまま教室にいても居づらいと出ただけだった。

「……なんだよ、ビビらせやがって。つか、腰抜けじゃん、あんな奴」
もう一つ思い出した。

今の男子は、卒業制作の時にぶん殴った奴の一人だった。

「和正君！」

教室を出ると、優奈が息を切らせてやってくる。

「なんだよ。何か用か？」

「和正君は悪くないからね」

「？ 知ってるよ」

「もう……先生も先生で、なんで和正君の話とか聞いてくれないんだろう。ね、先生に昨日の事話してみようよ。そうしたら……」

「そうしたら、きつとみんなの反省文が増えるぞ。それと、ホームルームが長くなる」

「でも、このままじゃ」

「まあいいじゃん。さぼってたのは事実なんだし、ちゃんと反省してもらうさ」

「けど……」

クラス委員を務める優奈が口添えしてくれたら法子も少しは話を聞いてくれるかもしれない。けれど、それで状況が好転しないと和正は思っていた。それほど法子を担任として信用していなかった。

法子も法子で成績の良い子を優先していることを隠しておらず、それを指摘したところで「そういう風にみえたかもしれない、今後は気を付けます」と開き直り、改善などしない。

「わかったよ。次からちゃんと言うから」

和正は今のセリフに自分自身首を傾げつつ、そのまま歩きます。

「あとさ」

優奈はまだ用があるらしく、隣を歩く。

「何？」

「さっきの話だけど……、本当？」

先ほどの話がどこまでさかのぼるのかわからない。今終わったばかりの話を蒸し返すようなタイプでもないし、少し考える。

「わかんない。なんの話？」

「だから、さっきクラスの子が言ってた話」

「なんだっけ？」

本当に思い出せなかった。

「だからさ、北村さんのこと。ほら、北村さんが用事あるからって話」

「ああ、北村は用事あったんだろ？ だから帰らせたほうが良くなって思ってたさ。あいつ、嘘言うタイプじゃないじゃん。それに俺、女がぐずぐず言う声って嫌いだし」

「そうじゃなくって」

「んー、別に良い恰好しようと思ったわけじゃないんだけどな。ほら、北村って真面目だし、用事があるなら先に帰って良いよって言って聞くタイプじゃないじゃん？ 俺なりに気を遣ったんだよ」

「そう」

「ああ、それだけだよ。別に北村がぐずぐずしてるから怒鳴ったわけじゃないよ。まあ、あのままぐずってたらかわらないけどな」

「そ……か」

「もしあいつが怖がってるっていうなら、言っておいてよ。あいつは昔から喧嘩っばやいから注意してねって」

「うん。必ず言っとく」

優奈はぐっとコブシを握ると、ふんと鼻息着いて決心していた。

「おいおい、必ずってなんだよ」

「きーめた。北村さんに和正君のこと、そう伝えておくから」

「ったく……っていうか、どこまでついてくるんだよ」

「いいじゃない。私もこっちにいくつもりだったし」

「そうなのか！？ でも、優奈は付いてないだろ？」

「へ？ あ……、もう！ 和正君のいじわる！！」

真っ赤になって引き返す優奈と、それに若干ひきぎみの視線を向ける男子数名。和正は空いている場所へ急ぐと、チャックをおろした……。

＊＊

六月、鬱陶しい梅雨が終わって五月の温かさを取り戻す。青々とした葉に残る雫が太陽の光できらりと光る。体育のプール開きはまだ少し先だが、水泳部の活動は一足先に始まる。

和正は最近よく掃除をしていると思いつつ、ブラシを走らせていた。

この時期にプール清掃を行うのが水泳部の恒例行事。

土曜日の午後、モップ片手にたまりにたまったヘドロと藻と砂を取り除く。

排水管に詰まると水泳部活動開始が遅れてしまい、死活問題になる。

泥を何か所に集めてチリトリで取り除き、もうこれ以上は無理となったところでガムテープでぺたぺた取る。

女子部員がきゃきゃと笑いながら作業してくれている間に、シャワーのノズル部分を掃除する。

他に消毒槽の掃除もある。消毒槽が汚れていては本末転倒と、こちらは部長が一生懸命何度も何度も掃除する。軽く水を張って、細かいほこりを流す。水泳部一同並んでプールに挨拶をして終了だ。

と、思っていたら、ポーンっとボールが飛んできた。それは今さっき掃除したばかりのプールに入ってしまった。
「おい、ボール取ってくれ」

綺麗になったばかりのプールに土が入る。もう一度掃除するのは面倒だが、土はつまりの原因。取り除かなければならない。

和正はボールを取ると、放り投げる。

「おい、どこ投げてんだよ」

少し逸れた程度だが、向こうは声を荒げる。浩司の声だった。

和正はそんな言葉は無視して土をガムテープで取る。全く余計な仕事を増やしてくれると思いつつ、作業した。

「おい、なんか言えよ」

返事が無い事にいらだたらしく、浩司が土足のまま、プールサイドへ来るのが見えた。

「なんだよ。何か用か？」

むっとしつつ、和正は浩司の前に立つ。

「なんだ、和正かよ。へっ、チビのくせに粋がりやがって」

半笑いで肩を突きとばす。和正はむっとして、ワイシャツの胸倉に手を伸ばす……ところで、部長が割って入った。

「喧嘩は余所でやってくれよ。今しがた掃除したばかりなんだから。それにそこは立ち入り禁止だし、バスケットは体育館か、校庭の隅っこのゴールポスト近くでやってくれよ」

部長は二人の雰囲気を感じ取ったから。普段から血の多い和正と、立ち入り禁止箇所ですぐで遊んでいる浩司に良くない雰囲気を感ずったから。

「んだよ。っせーな。お前は教師かよ」

「そう言わず。な？ ほらほら、みんな使うプールだし、汚したら困るじゃん。君らだって使うだろ？」

なだめすかし、笑顔で調子よく、時折相槌を打って話を合わせる部長は、なんとか浩司達を追い返していた。

「すみません、先輩」

「なーに、人の上に立つってのはこういうことさ。田所もそのうち理解できるようになるって。それより、次の水泳大会、期待してるぞ。入賞すれば、部員も増えるかもしれないし、そうしたら大会申請もしやすくなるし万々歳だ。頼むぞ」

「はい」

笑顔でへらへらしているだけではなく、野心もしっかり抱いてプレッシャーを忘れない。そんな部長がしたたかに思えた……。

七月に入り、水泳部の活動が開始されると和正も忙しくなる。

水泳をする時はいつも丸刈りにしている。特に強制されているわけではないが、これまで水泳をしていて学んだことだ。

髪が短い方が乾くのが早くて良い。そんな単純な理由だ。

和正が丸刈りで登校すると、皆面白そうにペタペタ触り始め、指さして爆笑する。

それらは慣れた物なので今更腹を立てることもせず、させるようにさせる。そうするとすぐに慣れてみんな何も言わなくなる。

それでも面倒なのが居る。

「だっはっは！　なんだその頭。恥ずかしくねーの？　このハゲ」
浩司だ。

彼は和正の丸刈り頭をことあるごとに指さして笑う。みんなが慣れた頃でも話題が無くなると指さしてからかい、時に頭に手を当て　「ごめん、ボールだと思ったわ」と半笑いで言いはなった。

和正はさすがに腹を立ててやり返そうと拳を握りしめて立ち上がる……が、それを制して優奈が声を上げる。

「やめなよ。和正君が困ってるじゃない」

確かに困った。握った拳の振り抜く先がなくなってる。

「なんだよ市川、仕方ねーじゃん。ボールに似てんだからさ」

悪びれずにバスケットボールを並べて見せると、周囲も堪えず笑いだす。

笑われるのも慣れっこになっていた和正だが、さすがにむっとしたらしく手を払い、睨み付ける。

「おこわ。ボールが睨んで来やがった」

どうせ反撃してこないと高をくくる浩司は笑い飛ばす。

「もう、なんで和正君ばかり」

「さあな。ハゲが珍しいんだろ？」

「静かになさい！」

げらげら笑いが起きていた教室がしんと静まり返る。

教室に法子が入って来て、いつものヒステリックな態度でクラス委員に号令を指示する。

クラス委員の筒井文雄と優奈が立ち、帰りのホームルームの開始を合図する。

連絡事項は特になく、新人戦に向けて練習するにあたって怪我をしないように注意するよう言われる。ただ、その日は別に法子の機嫌が悪かったらしい。

「部活に励むのは良いけれど、みなさんたるんでいます。急ぐあまりに掃除の手を抜いているのがわかります。黒板も黒板消しも全然汚れています。ホームルーム前も先生は静かになるのを待っていました。でも皆さんは五分待っても静かにできません。どうしてできないんですか？」

また小言が始まった。これが始まると思はらく止まらない。一か月に数回、思い出したように長話をするせいで「あの日だ」と陰で晒われているのを法子は知らないだろう。

「今から言う人は部活へ行く前に居残り作業をしてってください。宮崎君、吉田さん、田所君……」

今日はようやく水泳部の練習開始だというのに居残りを命じられた和正は、彼女の気まぐれにいらだっていた。

作業は細かいながらトイレの用具整理と音楽室の机椅子の整頓、昇降口の傘の整頓と場所が点々としていた。

言い渡された子達は各々、作業場所を分担して行うことにする。

和正はトイレの用具整理を任された。プールに入るから、少しぐらい汚れても良いだろうと言われてのことだった。

トイレの掃除用具はほとんどロッカーに投げ入れられる形で、戸を開けるとばらばらと散らばる。

箒でほこりを取り除き、バケツで水を撒いてブラシを掛ける。

黒ずんだ汚れを取り除いたあと、しばらく窓を開けて乾かす。

ブラシなどを軽く洗った後、水気が籠らないように立て掛ける。

こんなものだろうと思い、手を洗い、乾くのを待った。

他の子も整頓・掃除を終えたらしく、ぞろぞろ戻っている。みんな歩きながら法子への愚痴をこぼしていた。きっと今日の作業も新米教師として舐められた結果、押し付けられた雑用なのだろう。言い返しにくい立場でもあり、さらに若いということもあってお局様の音楽教師から睨まれているのがもっぱらの噂だ。

和正はトイレ掃除を早まったかもしれないと、水が引くのを待ちながら思っていた。

十十

「……」

他の生徒達が教室に戻ると、黒板は汚れたままだった。

窓ふきも終わっておらず、あるのは雑巾だけだ。

作業内容は確認しながら決めたわけではない。特に明確な約束もなく、俺はどこどこ、わたしはあっち、自分はそっちと勝手に分業していた。

人数は足りていたから、残った誰かがこなしているだろうと甘い観測をしていた。

その中には浩司も居た。

彼は作業もせず、バスケットボールのユニフォームに着替えており、大吾とボールで遊んでいた。

「あの、大崎君、掃除は？」

女子の一人、宮崎が恐る恐る尋ねると、彼は軽い態度でにやけながら言う。

「俺もう着替えちゃってさ。ユニフォーム汚すの嫌だし、あと頼むわ。行くぞ、大吾」

「ああ」

彼は返事も待たずにさっさと行ってしまふ。これは掃除のときの毎回のパターンだ。

宮崎は背を向けて聞こえない程度に舌打ちをしていた。他の女子達も浩司の粗暴っぷりを知っているから文句を言えない。

そろそろ部活が始まる時間となったところで、宮崎は部活へ行ってしまふ。彼女なりに自分の担当分は終わらせたのだから言い訳もつくと考えたのだろう。

それを見て、他の女子も続いて教室を出る。明日になったらきっと法子がヒステリーを起こすとわかっているが、自分一人が怒られるわけではないのならば、さぼり仲間の意識が働いた……。

和正が教室に戻ると、まだ汚れたままの黒板消し、曇ったままのガラスが見えた。

おまけにカーテン開けっ放しで褒められた状況とは言えない。

「なんだよ。誰だ、さぼったの」

と一人ごちるが、すぐに誰がさぼったのか見当がつく。今更体育館に行ったところで彼らが作業を行うとも思えず、仕方なく作業を行う。もしこのまましらばっくれたら、また反省文の提出を求められるだろうし、法子のきんさん声を聞くのもたまたまのものではない。

ひとまず黒板周りの掃除をする……と、また都合の悪いところに法子が来る。

まるで和正が作業をしているのを見張っているようだった。

「……まったく、君はどうしてそう動作が鈍いの？ ほんとうにとろくさい。なんでこんな簡単な作業もできないの？ ねえ、先生、そんな難しい事頼んだ？ ただ使った道具を整頓して、黒板消しとか綺麗にしておこうってだけだよな？ 君さ、提出物とかも遅いし、英語は毎回補習受けてるし、どうしてそういう態度なの？ 少しは改

善しようとししないの？　ねえ、先生の話聞してる？」

後半は反論できないが、前半部分で聞く気が失せた和正は作業を優先する。

「ちょっと！　人の話を聞くときはちゃんと相手を見なさい！」

その態度が火に油を注いだらしく、法子は和正の手を掴む。その反動で黒板消しが落ち、チョークの粉が舞う。

「あ、もう……ほんとうにグズなんだから……。ここもちゃんと掃除してから帰ること。そして、明日までに反省文を提出するの。いいわね！」

エナメルの靴が白く点々と汚れてしまい、慌ててハンカチを出し、軽く払う。そのまま説教を中断して去っていくところを見ると、彼女にとって指導よりも靴の汚れの方が重要案件なのだろう。

和正は粉まみれになった教壇を箒ではこうと掃除用具入れを開ける。

「君、何してるんだ？」

「あ、和正君。部活は？」

委員会の仕事を終えて教室に戻って来た優奈と文雄が声を掛ける。

「ん？　ああ。ちょっとな。いろいろあって、まだ掃除してる」

半ばやけくそぎみにそういうと、箒とチリとり片手に教壇に戻る。

「んもう、また一人でしょい込んで……。なんでみんなさぼるんだろ」

優奈は少しご立腹の様子で和正からチリトリを受け取る。

「いいよ。チョークで汚れるぞ」

「平気です。それより今日から水泳部の練習あるね。遅れちゃっていいの？」

急がないといけないが、そろそろ部長のありがたい話が始まっている頃。悪い人ではないが、話が長い人でもある。今顔を出すと長話を聞かされる。それなら、しっかりさぼって掃除を言いつけられていて参加できませんでしただと言った方が楽な気がする。

それに優奈が手伝ってくれる方が早く終わる。ありがたく箒を扱うが、少し困った。彼女はスカートのまましやがみ込むもんだから、見えそうになっていた。

「おまえ箒やってくれよ」

「え？　なんで？」

優奈は気付いていないのか、のんきに急かす。こういうところが困る。彼女も年相応の恥じらいを知ってもらいたかった。

「僕が代わりにやるよ。それよりも君は黒板消しを掃除したらどうだ」

すると眺めていただけの文雄が割り込んできて、そそくさと箒を使う。

眼鏡と七三分けのいかにも優等生的な彼は、成績優秀で法子からの信頼も厚い。

「君は体操着だろ。僕らは制服だ。チョークの粉がつくと取れないじゃないか」

「ああ、そうか」

言われて納得する。手伝ってもらっているのに、さらに迷惑をかけるのも気が退けるので反論はせず、黒板消し手にペランダへ出た。

今の時代に黒板消しクリーナーの無いことに不満を抱きつつ、勢いよく叩く。

すぐにもわもわチョークが舞って、げげげ咳き込んでしまう。こういう時は三角巾で目鼻口を隠すべきだと、一旦教室に戻り、タオルを探す。

「……だいたい田所君は問題行動が多すぎるんだよ」

「……でも、ちゃんと残って掃除してるし」

「……そもそもなんで彼が掃除を命じられたのかを考えようよ。彼がいつも自堕落な生活態度を取っているからじゃないか。浜崎先生も手を焼いているんだ」

「……それは、そうだけど、責任感があるから」

「……大崎君や笹井君がさぼったのを止めない彼がかい？ 言うことをしっかり言わないから掃除を押し付けられるんだ。ああやって虐められてるのにへらへらして、彼は情けなくないのかな」

言いたい放題言われているのを聞いて、戻りにくくなる。

確かに浩司や大吾に対して面と向かって文句を言えないことは情けないと感じる。けれど体格差もあるし、二対一。普段の学校生活を見るに、問題を起こしたところで法子は何もしないだろう。それどころか、きっと怒りやすい自分の方に矛先を向け、適当な和解をさせられる。

そういうシミュレーションをしてしまうのは、最近ネガティブになり過ぎているからかもしれない。

そんなことを考えている内にチョークの粉が薄くなる。頃合いを見計らい戻ると、二人も用具を片づけていた……。

＊＊

理科の授業の時だった。

水溶液を使って色々な反応を確かめる。

塩酸とマグネシウムの反応、塩の電気分解、石灰水の白濁から、さらに透明に戻るまでの様子を観測するなど……。

浩司の班が選んだのはフェノールフタレインとアンモニウム水と丸底フラスコを使うもの。気体が水に溶けて、気圧で水が噴水のように引っ張られる実験。

いろいろ大きな道具を使うので、目立つから選んだそうだ。

作業工程が複雑なことから、内容をよく理解していないこと、無駄話が多いせいで進捗が遅かった。

和正は簡単な実験を選択し、さっさと作業を終えて、その経過をレポートにまとめる。

そろそろ授業も終わるので、片づけを始めようと道具を手に流しに向かう。

ほとんどの班は実験を終えており、まだがやがやしているのは浩司達の班ぐらいだった。

「おい、おわんねーぞ、これマジで」

浩司は笑いながら、フラスコでカチカチ音を立てる。

「そろそろ片付けんべ。戻さねーと」

大吾は二つのビーカーを見て、どちらがフェノールフタレインなのか迷う。

「どっちがどっちだったけ？」

「ばか、アンモニウムは臭い方だよ」

浩司は大吾の頭をぐいっとビーカーに近づける。それはフェノールフタレインだったので特に臭いはしない。

「やめろよな。ったく」

大吾はフェノールフタレインを手に、試薬を戻す。

「こっちはアンモニウム？ 塩酸じゃねーよな」

手で煽って見たが臭いがせず、判別がつかなかった。

「それはただの水だろ。こっちがアンモニウムだ」

浩司が不意に大吾の鼻先にアンモニウムを近づける。

「うわ、くせ！」

顔を背ける大吾に爆笑する浩司。他の仲間にもアンモニアを嗅がせ、咽る様子を笑っていた。

「たく、ほんとやめろよな」

「わりいわりい」

いたずらに満足した浩司はアンモニアを戻しに行く。ただ、前も見ないで歩くので、水場で試験管を洗っていた和正とぶつかってしまう。

「うわ！」

「うっ！」

二人とも突然のことにしりもちをつく。

和正は洗っていた試験管を縁にぶつけてわってしまう。

浩司は持っていたアンモニア入りビーカーをしっかりと持っていたが、中身が衝撃で溢れてしまう。

「いてて、てめ、どこ見てんだよ」

「お前がぶつかって来たんだろ」

「んだと！」

浩司はかっとなって和正に掴みかかる。その時、和正の手にあった試験管の反対側が浩司の腕を切る。

「いて！ てめ！ ふざけんなよ！」

腕に走った痛み反射的に手を出していた。

和正の肩辺りに衝撃が走る。その衝撃でよろけてテーブルにぶかった。

「どうしたんだ！」

物音に驚いた理科教員の杉田聡がやってくる。

「こいつが割れた試験管で切りかかってきやがったんだ！」

出血に興奮した浩司は見せつけるように腕を出す。傷は浅いが確かに血が滲んでいた。

「本当か。ちょっと水で洗え。塩酸とかじゃないよな。おい、田所、なんでこんなことしたんだ！？」

切りつけたことと出血の事実理科室はざわつく。

「違う、俺は切りつけてなんか居ない。こいつが掴みかかってきたからだ」

「言い訳はいい。そんなことよりも試験管に何が入っていた？ おい」

「洗ってた途中でぶかったから、ただの水です」

「なんで洗ってたのにぶつかるんだ。いい加減なことを言うんじゃない。おい、保健室。クラス委員、市川、大崎を保健室に連れていけ。筒井は担任の先生呼んできなさい」

「……あ、え」

騒ぎの中心に和正が居ることに驚いていた優奈は、しばらく名前を呼ばれても気付いていなかった。

「……優奈、ちょっと優奈？」

呆けているところを千絵に肩を引っ張られて我に返り、和正の傍へ行く。

「保健室行かないと。和正君は大丈夫？」

「俺は別に怪我してないから」

「それどころじゃないだろ。なんだ、アンモニア落したのか。おい、雑巾もってこい。ったく、試薬使うつてのにどうして注意しないんだ」

聡はチリトリと箒を持ち、割れたガラスを集める。

「掃除終わった班は教室戻って終了まで自習。田所、お前は片付けろ」

「……はい」

全く話を聞いてもらえず、一人居残りをさせられることにいらいらする。

「……うわ、最悪。アンモニア臭いのね」

「……試験管で切りつけるとか馬鹿じゃない？」

「……だよ。いくら大崎がムカつくからって凶器使うなよな」

「……しかも返り討ちにあらうとかなだっせ」

突然のことにパニックから来る苛立ちを抱くクラスメート達。その矛先は雰囲気から原因と思われる和正に向けられる。

「おい、和正、大丈夫か？」

雑巾を絞っていると、芳雄がこっそり和正に近づき耳打ちをする。

「俺は平気」

「そうか。どうしたんだ？ 一体」

「あいつがふらふら歩いてきて、俺にぶつかっただよ。それでこけて試験管割れた」

「なんだ、切りつけたわけじゃないんだ。ほっとしたよ」

「そんなことしねーよ」

芳雄はほっとしてようやくしかめっ面をほぐす。

「こら！ なにやってんだ！ 渡辺、先生は教室戻って言っただろ」

聡の声が廊下に響く。和正が走って理科室へ戻り、床を拭く。

「先生、切りつけたってのは言い過ぎですよ。和正はぶっただけで……」

芳雄がわけを話そうと聡に近寄る。

「おい、先生は戻って言ったんだ。わけは後で二人に聞くから、お前は戻ってなさい」

「でも……」

「早く」

アンモニアに顔を顰めている聡はきつい口調で言い、芳雄を邪険に扱う。

「……」

芳雄はちらりと和正を見るので、和正も首を振る。

「すまん」

芳雄は無力なまま、理科室を後にする。

「杉田先生！ どうなさいました」

文雄に呼ばれてやって来た法子は、アンモニア臭さにむっと眉を顰める。

「それが、なんか急に喧嘩をしたらしく、田所が大崎に割れた試験管で切りかかったんです」

「切りかかった！？ あなた、それ、傷害じゃない！ 何を考えているの！？」

和正が口を挟む隙もなく、法子は和正にくっついてかかる。

「なんで我慢しないの。そうやってすぐ暴力に頼って恥ずかしくないの！ 本当に君は……毎週毎週なんで迷惑ばかり……ほんとうに問題児なんだから……」

怒りからか赤を通り越して青くなる法子。彼女は和正の耳を引っ張り、むりやり顔を向かせる。

「ちゃんと話を聞きなさい！ この卑怯者！ 百歩譲って喧嘩はいい。けど、なんで凶器を使うの！？ 卑怯じゃないの！」

「まあま、先生」

その剣幕に驚いた聡はやや宥め気味に言う。

「杉田先生、本当にすみませんでした。田所君は四月から問題行動ばかり起こして私も手を焼いていたのですけど、大崎君にちょっとしたいを出して、逆恨みしているようで……」

「うむ。困ったものですね」

「何か危険な薬品を使っていたということは」

「いえ、それはありませんが、今、大崎は保健室へ行っています」

「そうですか。わかりました」

ようやく終わったところで和正は腕を取られる。

「なんですか」

「なんですかじゃないでしょ。大崎君に謝りに行かないといけないでしょ。ほら、早く」

「なんで俺が」

「だから、君が暴力を振るったんだから当然でしょ！ 警察に連絡されたいの？」

「別にいいですよ。連絡してくださいよ」

「なんです、その態度は！ とにかく来なさい！」

和正の話など聞く必要はないと、無理に引っ張ろうとする。けれど、いくらチビでも日夜運動部で鍛えている和

正は、簡単に引っ張っていくことはできない。

「ちよっと、ふざけないの。君、自分がしたことわかってるの！？」

「わかってます。だから俺があいつに謝る理由がありません」

「ちっ、田所……」

法子に続いて聡も彼を引っ張る。さすがに二人がかりでは抵抗もできず、そのまま引きずられていく格好となった。

保健室では浩司が腕をぐるぐる回していた。もともと大した怪我ではなく、せいぜい水で洗った程度で血も止まっていた。無理に力を入れてようやく滲む程度で、ばんそうこうもしていない。

「いてて、いてーって」

その割に浩司は大げさに痛がり、優奈に肩を借りていた。

「ったくよお、田所、あいつばかじゃねーの？ いきなり切りつけるなんてさ。ね、市川ちゃん」

「えと、ええと、和正君はそんなこと……」

「なに？ 市川ちゃん、あんなハゲの肩もつの？ ちよ、勘弁してよ、俺刺されたんだよ。ほら、みてよこれ」
ばんそうこうにはもう血すら滲んでいない。それよりも、彼が零したアンモニアの匂いの方がきつかった。

「ねえね、市川ちゃんってさ、やっぱあいつのこと好きとか？」

「好きって、そんなことは別に……」

「同じ学校出身だっけ？ よくいるけどなんで？ ねえ」

「和正君とは昔から……」

「ふーん、昔から一緒なんだ。でも、別に好きってわけじゃないんだ。そりやそうだな。あんなハゲ……」

「……」

戸が開き、聡と法子に引っ張られて和正が入って来る。入ってくるなり浩司の前に連れて来られ、無理やり頭を下させられる。

「ほら、田所、大崎に言うことがあるだろ」

「無いです。俺は何も悪い事なんてしていない」

「なに言ってるんだ。お前が大崎に切りかかったんだろ」

「そうっすよ。俺、腕切られたんすよ！ これじゃ部活出られないじゃないっすか！」

「だから、そんなことしてない！ 大崎が急にぶつかってきたんだ」

「何いってんだ。なんで大崎がぶつかって腕が切れるんだ。自分のやったことの責任を取らないつもりか！？ そういうのは人間として未熟なことだぞ」

「だから！」

「あの……」

保健室、養護教員の今井松子が口を挟む。

「先生方、ちょっと乱暴すぎませんか？ ここは保健室ですし、そういう風に大声で話されると迷惑です。それに、大崎君の怪我は尖ったものが刺さったもので、切り傷ではありません」

「今井先生、ですが」

「田所君？ いいのかしら？ ええと、本当に君、切りかかったの？」

「違います」

「違うの？ じゃあ、どうして大崎君は怪我をしたの？」

「大崎がぶつかってきて、それで俺の洗っていた試験管が割れて、ぶつかったんです」

「そう。じゃあ、大崎君、それは本当？」

松子が浩司の方へ行き、じっと目を見て尋ねる。

四十後半の品の良い穏やかなおばさん教員の松子が順序だてて尋ねてくると、浩司は少しづつがわるい。

「はい、こいつがぶつかってきました」

「ええと、その時、この……そうそう、アンモニア水もってたよね？」

「はい。こいつがぶつかって来たから、そのせいで俺はこぼしちゃったんです」

「……うーん。それは変よね？」

「なんでですか？」

「だって、田所君は試験管を洗っていたのよね？ 歩きながら洗うのかしら？ 理科室のシンクは動かないわよね？」

「……」

「ねえ、大崎君、本当はどうなの？ 試験管洗った田所君がぶつかってきたの？」

「……俺が歩いてたら、急にこいつがでてきて、それでぶつかりました」

「そう……。で、それで大崎君が田所君にぶつかって、割れたわけね？」

松子は和正が頷くのを見てから浩司の方を見る。

「……はい」

嘘が通用しない状況になり、浩司は仕方なく認める。

「先生方、どうも話が違うようですが？ ただ、お互いぶつかったことは注意不足。これからは気を付けるように」

「はい……」

「はい」

松子は一息ついて、和正の方へ行き、しげしげと見つめる。

「どこか怪我したりしてないかしら？」

「俺は平気です」

「そう。それじゃ良かった」

「あ、はい、ありがとうございます」

「先生たちも、ちゃんと話を聞いてあげないといけませんよ」

松子の言葉に法子は俯き、下唇を噛む。だが、聡は不機嫌そうに和正を睨む。

「田所もちゃんと説明をしないからいけないんだ。自分の意見を言わないんじゃないか。何も伝わらないだろ。だいたい、試験を持っているのに周囲を確認しないことも衝突の原因なんだ。田所も大崎も、反省するところがある。それじゃあ私は授業がありますので、失礼します」

居丈高な聡はそれだけ言うと、保健室を出る。

その言葉に法子も顔を上げて和正を見る。

「君は注意不足だし、手際も悪いからこういう事故を起こすんです。しっかり反省するように」

「……………」

法子は踵を返して保健室を出る。このままここで言い合いをしても、松子の存在が都合悪いと察したのだろう。

「……困ったものですね」

松子は机に戻ると、ペンを走らせる。

「ええと、田所君。事故は第二理科室？」

「はい」

「そう。二人とも他に怪我がないのなら、教室に……あら、チャイムだわ」

授業終了の号令で会話が途切れた……。

放課後の事だった。浩司が和正のところへ来て胸倉を掴む。

また喧嘩の続きかと、皆どよめき立つ。

結局、あの後、和正の刃傷沙汰の誤解は解かれておらず、割れた試験管で切りかかった印象で固まっていた。

「お前のせいでズボンがアンモニア臭くなっちゃったじゃないか。こんなん穿けないだろ」

「俺のせいじゃないだろ。お前が前見ないで歩くからだだろうが」

「こっちは怪我させられてんだよ！ ふざけんな」

怪我という言葉に周囲の視線は和正に厳しくなる。普段は浩司も迷惑な存在だが、こうなると和正も新たに迷惑リストに加えられるてしまう。

「責任もってお前のジャージ貸せよ。どうせ帰宅部なんだから要らねーだろ」

「は？ なんで俺がそんなこと。自分のジャージ着てればいいだろ」

「とにかく貸せよ」

浩司はそう言うと和正のロッカーから勝手に体操着を取りだし、ジャージを取る。

「お前、何しやがるんだ！」

和正も慌ててそれを止めに入る。だが、大吾が遮り、邪魔をする。

「何をしているんですか！」

騒ぎに気付いた法子がやってきて三人を見る。

「こいつのせいでズボンが汚くなったから、ジャージを借りようとしたんです」

「なんで俺のせいなんだよ。お前が前みないで歩いているのが悪いんだろ」

「やめなさい！」

言い合う二人を黙らせようと、金切り声で叫ぶ。

「ズボンが汚れてしまったのは仕方ないし、田所君の責任もあるんだから、今日是我慢しなさい」

「なんです、俺が零したわけじゃないんですよ。ふざけないでください」

「でも、君も前を向いていなかったんでしょ？ 不注意だったんでしょ？ それに、大崎君に怪我をさせたんだから、それぐらいの責任、ちゃんと取りなさい」

「は？ 意味が分かりません」

「とにかく、君は自分のしたことの大きさをしっかり反省しなさい」

聞く耳を持たない法子にふっふつと怒りが湧いてくる。女性とはいえ、あまりの暴言に拳を握りしめ、睨み付ける。

「……………」

怒りを含んだ視線を向けられ、法子は思わず退く。彼女の人生ではこれまで男性から憎しみを込められた視線を向けられたことが無かったのだろう。暴力的な予感に思わず竦み、後ずさっていた。

「おい！」

それを見ていた浩司は和正を突き飛ばす。

「お前、先生に何してんだよ！」

「は？ なんもしてねーだろ」

突き飛ばされてしりもちをつき、今度は浩司を睨む。表情こそ怒っている素振りだが、その内心が目には浮かんでいないのか、嘲りを含む。

「先生、大丈夫すっか、こいつ最悪っすね。まさか女相手に暴力振るおうなんてよ」

クラス中に聞こえるように吹聴し、法子を立たせる。

「あ、ありがとう」

法子は怯えた様子でそのまま教室を出る。

「ったくよ、ほんと最低だな、お前」

浩司は和正のジャージを投げ捨てると、大吾と一緒に教室を出て行った。

取り残された和正は散らかされた自分のジャージを拾い、埃を払って戻した……。

「酷いと思うの！」

水泳部の練習を終え、タオルで頭を拭きながら戻ってくると、眉が上がり調子な優奈が出迎えてくれた。

それに付き合っただけだったのが芳雄と文雄。文雄はクラス委員で残っていたらしく、和正を見て背を向ける。

「ん？ ああ、だな」

先ほどまでは和正も怒りで視線も険しく、まるでゆでだこみたいに真っ赤になっていた。

「ん、さすがにあの言い方は変だよな」

芳雄も着替えて待っており、腕を組んで口をへ字にしていた。

「このままじゃ和正君が悪い子みたいになっちゃうじゃん」

「悪いってのは否定できないかな」

「確かに頭の出来がなあ……」

「お前が言うのかよ」

「お互い様っしょ」

「ふざけないでよ。ね、もう一度、浜崎先生に話してみようよ。今井先生にも相談してさ、そうしないと、和正君だけが悪いみたいになっちゃうもん」

優奈はまるで自分のことのように心配してしてくれたらしく、このままだと泣き出してしまいそうに俯いてしま

う。

「まあ、そうだけども。浜崎先生がそんなの聞いてくれると思うか？ あの先生おかしいし、言うだけ無駄だよ」
今日一日の出来事で法子への信頼がなくなった和正は、あきれ顔で優奈を見る。

説明したところで、一度下した決定を覆すような柔軟な思考をしてくれるとは思えない。特に松子が話を解決させた上であの態度を取るのだから、なお希望が持てない。

「でも……」

それでも優奈は呟く。

「田所君、こういうことはしっかり話し合いをしておいた方がいいと思うよ。僕は詳しい事情は知らないけど、ああやって問題行動ばかり起こされるのは迷惑だ」

文雄は強い口調で和正を責める。その態度は聡や法子と似ていて癪に障る。和正はじろりと彼を睨むと、文雄も瞬驚いたあと、慌てて睨み返す。

「おいおい、お前らが喧嘩腰でどうすんだよ。ちよっと落ち着けよな」

そんな空気を察した芳雄が割って入り二人を止める。

「とりあえずさ、先生に言うだけ言ってみようぜ。俺らも一緒に行けば、先生だって聞いてくれるよ」

「そうだよ。ね。このままじゃ和正君ばかり嫌な思いしちゃうし」

「……わかったよ、わかった」

詰め寄る優奈におされると断るのが難しい。それに、頷けばきっと彼女は笑ってくれる。

「良かった！ さ、行こう」

笑顔になって手を引く張る優奈。できれば頭を拭き終わってからが良いのだが、そんな時間も惜しいとばかりの早足だった。

職員室へ行くと、法子は提出物をチェックしながら書き物をしていた。

文雄と優奈の姿を見た時は軽く会釈をしたが、後ろの和正を見て眉を顰める。そのあからさまな態度に芳雄は口元を歪めていた。

「……市川さんは田所君のことでもう一度話し合えと言いたいのですか？」

「はい。それもありますけど、一方的に和正君が悪いような形にしているのが問題だと思います」

保健室の事を暗に匂わせるような言い方に、法子は優奈を見る。

「それは田所君がしっかりと説明をせずにいたのが問題です。自分の意見をはっきりともち、それを伝えられなければ、それは相手にとって迷惑なの。わかる？」

「でも、杉田先生も浜崎先生も全然……」

「とにかく、明日、ホームルームで一度話し合いの時間を持ちます。それでいいですか？」

優奈の反論を遮り、法子は書類をほとんどまとめる。

「……はい、わかりました」

強引な態度で話を中断される。まだいいことがありそうな優奈だが、仕方なくお辞儀をして帰る。

「でも、田所君も自分の事でしょ。どうして市川さんに代わり言わせる必要があるの？ 君はそうやっていつも後ろに隠れているつもり？」

「……失礼します」

反論をしたところでまた遮るだけだろう。そう思い、和正は踵を返す。

「そうやって嫌なことから逃げて……、本当に進歩が無いわね」
安い挑発と何処吹く風。柳を揺らすような寒風と無視を決め込むことにした。

「浜崎先生、酷いよ」

帰り道、優奈がぼそりと呟く。

「ああなると思ってたけどな」

「なんで？」

「そりゃ、俺が嫌われてるから」

「嫌われているというより、なあ……」

芳雄は腕を組みながら首をかしげている。彼なりに思うところがあるらしく、一方でそれを考え過ぎと思い、それが巧くまとまらないらしい。

「いや、しょうがないよ。田所君は生活態度が悪すぎるから」

一人法子の肩を持つ文雄に、優奈が驚いたように彼を見る。

「そんな言い方」

「だってそうだろ。部活はしてないし、喧嘩ばかりするし、提出物も遅い。何かという时无駄だからと最初からあきらめる。それを好意的に評価しろってほうが無理だよ。それに事情の説明だってなんで市川さんに任せるんだ？おかしいよ。先生も言ってたじゃないか。自分の考えを持ってそれを言えないと、成長はないって。違うかい？」

優奈に向かって力説する文雄に、彼女は反論の言葉が見つからない。
彼女自身、よかれと思っていたけれど、前に出過ぎた気もあり、一方で和正が自分のことなのに消極的なのが不満だった。

「でも……」

それでも事故のいきさつを知る優奈はしこりが残る。

「ま、いいさ。明日また話すし、それでだめならそうなんだよ。別に俺は気にしてないし」

「でも……」

和正なりの気の遣い方は付き合いの長い優奈にとって頼りやすいものなのだが、今は少し違う。

「んだな。ま、いくらなんでも浜崎先生だっておかしなことしないだろ」

芳雄は樂觀的に言うけれど、彼自身、そうなってほしいという願望があるのか、疑問を隠せないぎこちない作り笑いをしていた。

「ふん。そうやって誤魔化してばかりだな、君は」

文雄は捨て台詞を残すと、曲り角を折れる。

「あ、うん。じゃあ、また明日……」

優奈はとりあえず挨拶をする。そろそろ自分も分かれ道に着く。優奈はまだ少し話し足りないのか立ち止まる。

「んじゃ、こいつは俺が送ってくから、市川さん、じゃーねー？」

「うん」

芳雄は気付かぬふりして行ってしまうとする和正に気付いて、慌てて背中を押す。

「なんだよ」

「お前なあ、市川さんのことも考えてやれよ」

「んなこといってもな……」

和正はぶつくさ言いながら通りを行ってしまふ。
まだ何か言いたげな優奈だったが、とぼとぼと帰路についた……。

＊＊

その日は朝から陰鬱だった。

ホームルームがいつもより五分早く始まり、法子が陰しい表情で教壇に立つ。

「今日は挨拶を省略してホームルームを始めます。田所君、起立してください」

どよめく中、和正は言われた通り起立する。

「昨日の理科の実験中の事故、皆も知っているとします。田所君と大崎君のことです。先生の方からみなさんに説明をする時間取るように頼まれたので、皆もしかりと聞くように。ええと、まず、事故の経緯は試薬を戻そうとした大崎君と周りを注意せずに試験管を持っていた田所君がぶつかりました」

優奈は驚いた様子で顔を上げる。

「その結果、二人はぶつかり、大崎君は試薬をこぼし、田所君は試験管を割りました。パニックになって大崎君の腕を切りつけてしまいました」

「そんなこと……先生」

優奈は抗議しようと手を上げる。

「市川さん、今は先生が話しています。みなさんの意見は後で提出していただきますから、それまで発言は控えてください」

「でも」

「市川さん」

法子は大きくため息をつき、出席簿を乱暴に扱う。

「……すみません」

その態度に今は絶対に聞いてくれないと悟り、仕方なく手を下げる。

「本来ならここですっきりと事故の経緯を説明して欲しかったんですけど……。杉田先生が指示をしてくださったおかげで、大崎君の腕の怪我も大事にいたりませんでした。ですが、薄い試薬といえど皮膚を焼くことがあります。みなさんも実験を行う時は周りに注意してください。いいですね？」

一方的に捲し立てると、今度はレポート用紙を配る。

「それでは昨日の事故について、みなさんの意見を書いてください。今日中に提出するように」

こんなはずでは……と言いたそうな優奈は法子と和正を交互に見る。彼は頬を何度か掻くと、回って来たレポートを後ろに回すのと同時に座る。

「田所君、何かみんなに言うことは無いかしら？」

「？」

「はあ……。いい？ 君のせいで授業が妨害されたの。実験どころじゃなくなったわけ。わかる？ クラスのみんなが勉強をする機会を奪ったのよ？ 普通、何か一言あってもいいんじゃない？」

「はあ、すいませんでした」

「そうやって謝ればいいって態度で皆が許してくれると思うの？ 君は本当に思慮が浅い、視界が狭いのね」

「はあ、すいません」

「まったく。そうやってふて腐れて、自分のことなのに市川さんに言わせて……。あ、クラス委員、少しいいかしら？」

「あ、はい」

法子は優奈と文雄に手招きすると、教室を出る。優奈は慌ててそれに続く。法子が出て行ったのを見て、おしゃべりが始まる。

「……また反省文かよ」

「……なんで俺らまでやらないといけないんだよ」

「……最悪。ほんとアイツ、迷惑ばっかだよ」

「……まじ忙しくてしんどいのにさ……」

「……どうして大人しくできないのかね」

皆愚痴をこぼしつつ、鉛筆片手に適当に心に無い反省文と事故に対する感想を書く。

和正は深く息を着くと、ようやく腰かけた。

十

「先生、今のホームルーム、おかしいじゃないですか。全然事実と違います」

「……市川さん。貴方は事実と違うと言いますけど、本当に見たんですか？」

「それは……でも、今井先生だっておっしゃっていたじゃないですか」

「今井先生は保健室の先生でしょ？ その場に居なかったの。田所君が嘘をついてるかもしれないじゃない？ 大崎君だって、杉田先生だって見てるのに……」

「それは、大崎君と杉田先生だって……」

「……市川さん、貴女、杉田先生と大崎君が嘘をついているというの？」

「でも……」

「それじゃあなんで田所君は説明できなかったの？ 今井先生に聞いたのだって、本当は自分に都合の良い意見を言ってくれたからじゃない？ それに、本当に彼が悪くないなら、なんで身の潔白を証明するために保健室に来なかったの？ 私と杉田先生に引っ張られて行く必要はないわよね？ 違う？ 自分の足で行けたのに、どうして行かないの？ どうして、市川さんが代わりに言うの？ 田所君に後ろめたいところがあるからでしょ？ 違う？」

「杉田先生は和正君から話を聞こうとして……」

「それから、貴女も男性相手に下の名前で呼ぶのはどうかと思います。どうして和正君って呼ぶのかしら？ 大崎君は大崎君と呼ぶのに。そうやって差別してはいけません」

「！……よ、呼び方なんて今は関係無いじゃないですか……」

「そうやって自分に都合の悪い事は聞かない態度。貴女が田所君を庇いたいののはわかったけれど、それは彼の為になりません。彼が何も説明できなかったのも、結局は貴女が居るからじゃないかしら？ 貴女が先回りして何でも解決しているから、今回みたいに自分のしてしまった事故の責任に向き合わずにふて腐れるのよ。わかる？ 貴女のせいなの」

「私は別に……」

「とにかく、この件はちゃんとレポートを書いて提出なさい。それで何か進展がありましたら、また時間を取ります。それでいいですね」

「……」

「はい」

俯く優奈に代わって文雄が答える。

「そろそろ一時間目が始まります。教室に戻りなさい」

「はい。わかりました」

文雄の返事に法子は頷き、そのまま廊下を行ってしまふ。

優奈はまだ言いたいことの一つも言えておらず、法子の去っていった方向へ無意味に手を伸ばす。

「僕も先生の言うことに賛成だ。市川さん、君は田所に寄り過ぎてる。そういう態度は良くないよ。彼にとっても、君にとっても……」

「そうなのかな……」

「それに、自分のことを自分で説明できないのは彼にやましいことがあるからじゃないのか？　いくら割れたからって、試験管を突きだしもしないで腕を切りつけられるわけないんだ。少し前も大崎君から虐められてたみたいだけど、その仕返しだったんじゃないか？」

「和正君はそんなこと！」

「そうやって名前で呼ぶの、注意されたばかりだろ？　君は田所を鼻糞し過ぎてるんだ」

「……………」

「彼だって彼の人生があるんだ。市川さんがなんでもかんでも手伝ってやるわけにはいかないし、そろそろ一人でさせるべきなんじゃないかって僕は思う。少なくとも、昨日の二人を見る限りはね……」

「……」

「僕もこんなふうに言うのは嫌だけどさ、彼は市川さんに甘えすぎてやる気が見られないよ。今回だって無駄だ、知らない、しなくていい……。そればかりだ。市川さんがこんなに頑張っているのに」

「……………」

「彼が余計だっというなら、突き放さないと。もし、彼が助けてっていったら、その時手を差し伸べればいい。その時は僕もできる限り協力するよ。そういう付き合いにシフトするべきなんじゃないかな？」

「……そう、なのかな」

「すぐには無理でも、それが結局、田所のためになる。いまのままじゃ市川さんも田所もダメになるよ。考えてみてくれ」

「……考えて……、考えてみる」

自分がよかれと思ったこと。それが裏目に出てしまったこと。いつもは自分と和正の二人でいたからわからなかったけれど、本当は歪な関係になっていたのかもしれない。法子や文雄の意見も頷ける部分がある。もしかしたら、自分は和正の邪魔になっているのかもしれない。だから、彼も自分を拒否するような言葉を選んでいるのかもしれない。もしかしたら、和正は自分を……。

「……どうなのかな、かず、田所君……」

「ねえ、優奈」

文雄と入れ替わりで千絵がやってくる。廊下で長話を聞いていたようで、耳打ちするように小声で話だす。

「……そういうの止めた方がいいと思うよ」

「そういうのって？」

「だからさ、田所のこと庇うの」

「私は別にそんなつもりじゃ……。それに大崎君にだって問題があるし、昨日のことだって事実と……」

「優奈はそう思うかもしれないけど、皆はそう思わないよ。そりゃ大崎は迷惑な奴だけども、そういうのってしょうがないじゃん。ああいう粹がってる奴は無視してはいはいやってればいいのに、いちいち揉め事おこしてたらきり無いもん」

「でも、ちゃんと話さない」と

「それに田所だって問題あるんじゃないの？ 優奈は話さないっていうけどさ、今年に入ってアイツ関連でホームルーム使ったの二度目だよ？ あいつ、そういうの話したり説明したりした？ いっつもやればいいだって感じだし、今日だって自分が悪いのにふて腐れてとりあえず謝りますごめんなさいだけ。優奈は付き合い長いからそれでも肩持つかもしんないけど、あたしとか他の人はそう思わないってば」

「それは……うん」

「それに昨日だってアイツ、浜崎先生に暴力振るおうとしたわけでしょ？ 大崎が止めたっていうじゃん」

「か……田所君はそんなことしないよ。女の人に暴力なんて」

「でも、浜崎先生はそう感じたわけでしょ？ 普通しないよ、そんな態度」

「だって……」

だんだんと和正をかばう言葉が見つからなくなる。

昨日の事も優奈はよく見ていない。和正と浩司が何か言い争いをしているのに振り返ったら、法子が割って入って、それで解決するだろうと思っていた。

しかし、現実の続きは法子が後ずさり、浩司が和正を突き飛ばした。

法子に手を上げようとしたと言われても、それを疑うに足る理由が無い。

「じゃあ、なんであいつは昨日、釈明しなかったの？ 優奈は浜崎先生のところ行ったんだよね？ その時に説明できたじゃん。優奈にまかせっきりにしないで」

「……」

法子に抗議に行く前も和正は否定的だった。それは本当に無駄だからと思っていたからだろうか？ それとも本当は何か隠していたからか？

例えば後ろめたいこと。実は本当に法子へ暴力を振るおうとしていたのでは……。

だんだん疑いが濃くなっていく。

せめて和正の口で説明があれば。

「とにかく、なんでもかんでも田所田所って考えるのはやめようよ。じゃないと優奈まで虐められるよ」

「……………うん」

優奈は頷き、千絵に引っぱられて教室に戻る。

「……最悪だよな。田所」

「……だよな。いつまでガキなんだか」

「……大崎も嫌いだけど、田所も迷惑だよな」

「……こそと囁かれる言葉に、これまでのような反感だけを持てずにいた……。」